



Title	大英図書館所蔵ルーン文字マニ教文書Kao. 0107の新研究
Author(s)	森安, 孝夫
Citation	内陸アジア言語の研究. 1997, 12, p. 41-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/18230
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大英図書館所蔵ルーン文字マニ教文書

Kao.0107 の新研究

森安 孝夫

1. はじめに

本稿で取り上げる文書は、イギリスのスタイン氏が⁽¹⁾1913～1916年に行なった彼の第3次中央アジア探検の際にトルファン盆地の高昌故城で入手し、その報告書である *Innermost Asia* にルーン文字（突厥文字；East Turkic Runic script）のテキストのある面だけの写真を載せ、トムセン氏によるその解読と共に発表したものである。スタインが現地で付した原番号は Kao.0107 であるが、現在はロンドンの大英博物館において Or.8212-1692 という整理番号が付けられ所蔵されている。私は1993年9月にロンドンを訪れ、原文書に直接触れて詳しい調査を行なったところ、約70年前のトムセンの読みをかなり改善することができた。その結果、本文書が従来考えられていたよりはるかに重要なものであることが判明した。たまたま本年、アメリカのクラーク氏が、これまでに公刊されたことのある古トルコ語マニ教文書を網羅的にリストアップする労作を発表したが⁽³⁾、そのリストにも本文書は漏れているので、ここに小稿を発表する意義はさらに増大したように思われる。

本文書はスタイン隊が自ら発掘したのではなく、現地のウイグル人から購入したものである。それは大英図書館の Or.8212-1869 / 1870 / 1871 の3断片を入れたポリ袋の中にある次のような手書きのメモから明らかになる：“Manichaean ffrs. incl. Kök-turkic with miniatures brought by Kurban Niaz as from centre of Kao. 0107-0110 3. xi. 1914.” このメモと一緒に保存されている3断片はいず

(1) Stein 1928, Vol.III, pl. CXXIV.

(2) Thomsen 1928: “Fragment of a Runic Turkish Manuscript Kao.0107, from Kara-khōja.”

(3) Clark 1997.

れもマニ教徒のみが用いるマニ文字で書かれており、しかもそれぞれが Kao.0108, Kao.0109, Kao.0110 という原番号を保持している。このメモはスタイン自身が書いたか、スタインのメモを書き移したものに違いないから、我々の Kao.0107 を含む 4 点は、クルバン=ニアズと名乗るウイグル人が高昌故城の中央部で見つけたのを、1914年にスタイン隊がまとめて購入したもので、後に整理の段階で Kao.0107 のみが Or.8212-1692 として他の 3 断片と分離したことが分かる。一方、*Innermost Asia* では、我々の Kao.0107 の出土地点を、スタインが高昌故城で Kao. I と名付けた遺跡の中の i 番という部屋であると説明している。⁽⁴⁾ そしてスタイン自身はこの Kao. I はグリュンヴェーデルのいう Ruine χ に相当するだろうと注記する。⁽⁵⁾ しかし Kao. I の位置を *Innermost Asia*, Vol.III にある高昌故城の平面プランたる Plan 24 “Sketch Plan of Ruined Town of Idikut-shahri, Kara-khōja”⁽⁶⁾ で確認し、これをグリュンヴェーデル作成の高昌故城の平面プランと比べてみると、それは Ruine χ ではなく、むしろ同じく中央部にある Ruine K⁽⁷⁾ に当たるようと思われる。実際、この Ruine K (以後は遺跡 K と呼ぶ) からは多種多様のマニ教関係の文書並びに遺物が出土しており、従来の研究から、遺跡 K 自身が本来マニ教寺院であったことには一点の疑いもない。⁽⁸⁾ さらに、高昌故城から将来されたマニ教文書のうち出土地点の明確なものは、その大部分が遺跡 K ないしはマニ教=仏教二重寺院遺跡 Ruine α のいずれかである。遺跡 α は高昌故城の西南隅に偏っており、中央部に位置する遺跡 K とは離れているから、やはり本文書は遺跡 K から出土した蓋然性が高いと思われる。

(4) Stein 1928, Vol.II, p.590: “The Manichaean MS. fragments, Kao.0107-110, which I purchased, including a Runic Turkī fragment with remains of a miniature painting, were said to have been found in the large apartment marked i.”

(5) Stein 1928, Vol.II, p.590, footnote 3.

(6) Grünwedel 1906, fig.2 in pp.8-9; Le Coq 1923, p.23.

(7) Cf. Le Coq 1913, pp.7-9; Le Coq 1923, pp.23-28; Klimkeit 1982, pp.23-25; 森安 1991, pp.131-132, 137.

(8) Cf. Manichaica I, p.3; Le Coq 1913, pp.7-9, pls.1-6 and 69; Le Coq 1923, pp.23-28, 34-36, 38, 56-58 and pls.1, 4, 8; Boyce 1960, pp.X-XXI, XXXIII-XXXV, 69-79; Klimkeit 1982, pp.23-25; 森安 1991, p.150; Gulácsi 1997, pp.201 (table 2), 202. なお遺跡 α がマニ教寺院 \nearrow

2. 文書の外観

Innermost Asia に掲載された写真はモノクロであったが、実際にはテキストは赤黒2色の細かくきれいな文字で書かれている。さらに興味深いことに、背面には、かなり色褪せているとはいえ、2人のマニ僧が対話しているとおぼしき場面を描いたミニアチュールさえある。これについてスタインは単に“a Runic Turk fragment with remains of a miniature painting”⁽⁹⁾と記し、一方のトムセンも“there are traces of drawings, among which are plainly seen one or two faces above a dress in red or with a red outline.”⁽¹⁰⁾と述べただけで、それ以上の説明はしていない。その後、トルコのエシン女史が本文書を取り上げ、そのミニアチュールを図版として掲げたが、その記述は信頼性に欠け、かつ図版も白黒で不鮮明である。⁽¹¹⁾近年のマニ教研究の進展には、絵画の領域も含めて目覚ましいものがあるので、ここに新たな資料を提供する意味を込めて、表裏のカラー写真(Pls.II & III)とミニアチュールの修正画像(Pl.IV)を併せて掲載することとする。カラー写真の撮影と発表の許可を与えられた大英図書館に対し、深く感謝したい。

原文書の大きさは、ルーン文字が正しく読めるように見て縦10cm、横8.2cmである。これが本来の縦横であり、ミニアチュールの方が本文を基準にすれば時計回りに90度ずれていることについては、後でもう一度説明する。紙色はベージュ系(beige ~ beige clair)，厚さは中手、漉き縞がなく均質な上質紙である。各国探検隊がトルファンや敦煌をはじめとする中央アジア各地から将来し、現在は各国に散在する出土文書の紙質を調査してきた私の経験によれば、

メ から仏教寺院に変わったことは、ズンダーマン氏と私がそれぞれ独立して同時に明らかにしたところであるが、その歴史的背景については森安の方が詳しい。cf. 森安 1991, pp.150-154; Sundermann 1991, pp.285-287; Sundermann 1992, pp.69, 84. しかるにグラーチ女史はまだこの事実に気付いておらず、マニ教文書と仏教文書が同じ遺跡から出土することに困惑している、cf. Gulácsi 1997, pp.202-203.

(9) Stein 1928, Vol.II, p.590.

(10) Thomsen 1928, p.1082. 実際には2人ではなく4人いる。ただし主要な2人以外は頭部がわずかに残っているだけである。Pl.IVの修正画像を参照せよ。

(11) Esin 1976, p.53 and pl.III (pp.71-72).

(12) Cf. Klimkeit 1982; Ebert 1994; Gulácsi 1997.

このような上質紙は、中央アジアが紙の主産地である中国本土と直結していた7～8世紀のものに多く見られるが、10世紀のものになると稀にしか見られない。

もとは見出し(header, heading)があったと思われる0行目の文字は他よりやや大きく、紺色のインクが使われている。本文の左欄は1～10行目が墨字で11～15行目が朱字、右欄は逆に残存している4～10行目が朱字で11～15行目が墨字になっていて、もともとはきれいな対称を示していたことを推測させる。左欄の欄外には紅～紫紅色の植物(おそらくザクロ)⁽¹³⁾文様がうっすらと残っている。ミニチュールを含む文書の性格については、第5節で取り扱う。

3. テキストと翻訳

以下にはまずルーン文字をローマ字に機械的転写する方式を一覧表として掲げ、次に本文書のテキストの機械的転写(Transliteration)と理論的再建形(Transcription), そして英訳と和訳を載せる。

文字表 *System of the Transliteration*

Vowel

front	double	BACK
a (for a / ä)	𠁃 𠁃 𠁃	
i (for ī / i)	𠁄 𠁄	
ü (for ü / ö)	𠁅 𠁅 𠁅	W (for u / o) 𠁇 𠁇 𠁇 𠁇

Consonant

front	double	BACK
b (for b / v / f)	𠁈 𠁈 𠁈	B (for b / v / f) 𠁉 𠁉
c	𠁊 𠁊 𠁊 𠁊	
ič	𠁌	
d	𠁍 𠁍 𠁍	D 𠁋 𠁋

(13) Cf. Gulácsi 1997, p.197.

g	፻፻፻	G (for γ) ፻፻፻
k	፻፻፻፻	Q ፻፻፻
ük	፻	uQ ፻፻
i	፻፻፻	iQ ፻፻
l	፻፻፻	L ፻፻፻
lt	፻	
m	፻፻፻፻	
n	፻፻፻	N ፻፻
nc	፻፻፻	
ŋ	፻፻፻፻	
nt	፻፻	
ny	፻	
p	፻	
up	፻	
r	፻፻፻፻፻፻፻፻	R ፻፻፻
s (for s / š)	፻	S ፻፻
š	፻፻	Š (for s / š) ፻፻፻፻፻፻፻
t	፻፻፻	T ፻፻፻
y	፻፻	Y ፻፻
z	፻፻፻	

Text

- Bold** Letters wholly restored.
- Italic* Letters partly damaged but restored with certainty.
- a/(b) Ambiguous readings.
- [abcd?] Uncertain readings.
- / / / Damaged and illegible letters. Number unknown.
- . . . Illegible letters with some traces. Number known, indicated by points.

Left column:

0 / / / / / d Q	0 //////////////
1 / / / / / / / / z(ř)	1 //////////////////////////////
2 / / N G W š k : L p : Š i ñ	2 /// nřyošak alp sřin-
3 Q W R : t i g i n : t ė r	3 qur tegin tänri-
4 m : B T a D N : Q W T i ñ	4 m avtadan qutüñ-
5 a : ü t ü n t i : Y L B R	5 a ötünti yalvar-

6	Ti:m nŋ:a Ti ma:	6	tü mäniŋ atüma
7	bir:N W m:[t?] ül [k?]:bi	7	bir nom [töläk?] bi-
8	tizün:tp:mn:b	8	tizün tep män [bi-
9	i ti [g?]: Y B W z:ü [z ü?] m	9	tig?] yavuz [özüm?]
10	:W z rk:p WG W r:L p	10	wzrk pwyr alp
11	s iŋ Q W R:tig in:üčü	11	s iŋqur tegin üčü-
12	n:b it id m:Q m G:B G	12	n bitidim qamay bay-
13	R i N:birlä:ög rnč	13	r i n birlä ögrünč-
14	ü n:r ip:NG W š k:a b	14	ü n ärip n iyošak äv-
15	iŋ a:t . / / / / /	15	iŋä ////////////
	[missing]		[missing]

Translation

- [] Words not in the text but added to improve the English.
 () Translator's notes.
 ////////////// Illegible or missing.

Right column: (Names or titles of donors.)

Left column:

//////////// An auditor (lay member of the Manichaean church), Alp Sinqur Tegin (= main figure of donors or sponsors), begged and implored to His Majesty, My lord the Bishop (= *avtadan / aftadan*) [as follows]:

"Please let [a scribe] quietly(?) write (or copy / transcribe) a sacred book in the name of myself [as a donor]."

[So] I, Wzrk (possibly from West Iranian *wuzurg*) Pwywr (from Parthian *puhr*?), whose writing(?) is unskillful, have written (or copied / transcribed) [this sacred book] for Alp Sinqur Tegin. Being with joy together with all his relatives, to / for the house of the auditor, //////////

和訳

右欄：

(寄進者であるウイグル人マニ教徒たちの人名ないし称号の列挙。)

左欄：

・・・聴衆(=一般マニ教徒)であるアルプ=シンヶ月=テギン(テギンは王子の意；寄進者の代表的人物)が聖なるアフタダン(=マニ教団の高僧)殿に[次のように]御願い申し上げた：

「[寄進者としての]私の名義により一つの聖典を落ち着いて(?) [ある書記に]書き写させてください」と。

[そこで]私、文字の(?)拙いウズルク=プグルが、アルプ=シンヶ月=テギンのために[この聖典を]書写しました。彼の全親族と共に喜びにひたっていて、聴衆の家に(のために?)・・・

4. 語注

R5 / 8-9 / 9 / 14：本文書にinalの称号を持つ人物は4人見えるが、ウイグル文棒杭文書にも頻出する。cf. Müller 1915; ED, pp.184-185; Hamilton 1986; 森安 1991, pp.190, 199. 支配層の間ではかなり一般的な称号であったようである。

R5 / 8：この漢語「將軍」起源の称号sajunを持つ人物もウイグルには非常に多く、枚挙に暇がない。cf. Müller 1915; ED, p.840; Hamilton 1986; 森安 1991, pp.45, 187-190, 194.

R6：kitmä. 動詞kit-「行く」の語幹に否定辞-mä-の付いた命令形「行くな」に由来する人名であろう。

R7 / 9-10：tarqan. 隋代以前にトルコ語に借用された漢語「達官」起源の称号であるが、後には漢語に逆輸入されてしばしば「達干」と音写された。cf. ED, pp.539-540; Hamilton 1986; 森安 1991 pp.90, 159, 188, 195-196.

R11：apa. 元来は様々な意味を持つ親属名称であるが、後には称号や人名としても使われる。cf. ED, p.5; UW, p.166; Hamilton 1986; 森安 1991, pp.188, 196.

R12 : siliγ. ここでは後舌音語 (words containing back vowels) であるが、普通には前舌音語 silig として現われる。いずれにせよ「きれいな、清らかな」の意で、女性の人名要素としてよく使われる。ここでは語頭に文字 Š が使われているが、クチャのクムトラ千仏洞の壁画に描かれたウイグル女性の供養人像題銘に「思力」(*si-liak)⁽¹⁴⁾ と漢字音写された実例に鑑みて、語頭の発音が [s] であったことは疑いない。cf. ED, pp.826-827; Hamilton 1986.

L2 / 14 : 「聴衆」と呼ばれるマニ教教団の一般信徒を意味する nīyošak (cf. 石田 1925, pp.162-165; Haloun / Henning 1952, pp.195, 212; 森安 1991, pp.72, 198) は 2 行目と 14 行目とに現われるが、いずれも NGWšk⁽¹⁵⁾ という前舌音語 (words containing front vowels) の /s/, /š/ を表わす文字 s に一点を付加した特別な形 š を使い、発音が [s] ではなく [š] であることを明示している。ただし、ルコックが発表した別の文書 (Le Coq 1909, p.1047, T.M.332) では、後舌語の /s/, /š/ を表わす文字 Š を用いて表記された NGWŠk という実例があり、発音に不安を残す。しかし、Sertkaya 1985, p.141 に引用される Mz.169 (T I x 21) には NWGWŠ[k] とあるので、[š] の発音に疑問の余地はない。因みに、チベット語文書にチベット文字で ne-shag ネシャクと表記された例もある (cf. Pelliot tibétain 1283, 1.87; 森安 1977, pp.7, 11).

L2-3 / 10-11 : Alp Sinqur Tegin という人名は、我々によって 1019 年の作成であると確定されたウイグル文字の棒杭文書にも現われる、cf. Müller 1915, p.23, 1.13. しかしそちらは 11 世紀の仏教文書であり、こちらは後述するよう 9 世紀前後のマニ教文書であるので、両者が同一人物である可能性は低い。Sinqur の語頭は 2 行目では後舌音系列のルーン文字 Š で、11 行目では前舌音系列の文字 s で書かれている。語頭音は [s] であったと考えられる。sinqur 「鷹」は男性用人名

(14) GSR, Nos.973a+928a.

(15) クムトラ千仏洞第 75 窟に「妹骨碌 (qutluy) 思力 (silig/siliγ)」、第 79 窟に「額里思力公主 (il silig/siliγ qunčuy)」とある。cf. 梁志祥・丁明夷「新疆庫木吐喇石窟新發現的幾處洞窟」『文物』1985-5, pp.4-5; 『中國石窟 クムトラ石窟』東京, 平凡社, 1985, pp.231-232; 莊強華「庫木吐拉第 79 号窟初探」『新疆文物』1986-1, p.77.

(16) Cf. 森安 1980, pp.334-335, 337; Hamilton 1986, p.XVIII; 森安 1991, pp.152, 184.

要素として頻出する, cf. ED, p.838; Hamilton 1986.

L4 : トムセンはここに固有名詞がくると推測したが, 正しくは *avtadan / aftadan* という称号である. この称号を判読できたことで, 本文書の価値が一挙に増大したといつても過言ではない. 言うまでもなくこれは, 漢字では「拂多誕」と音写されるマニ教団の五階級中第二位の高僧を指す. cf. UW, p.280; Hamilton 1986, p.60; 森安 1991, pp.71-72, 75, 78-79.

L6 : トムセンの読み *äbimä* を *atüma* と修正する. ルーン文書では前舌音系列の文字 *b* と後舌音系列の文字 *T* の形はきわめてよく似ているので, 注意を要する.

L7 : nom. ギリシア語に由来するソグド語の *nwm* 「法, 教義」がウイグル語に借用され, マニ教徒・仏教徒の間で「法, 教義」のほかに「聖典, 書物」の意味を持つようになった. しかしこれは同時に起こったのではなく, ソグド人マニ教徒から直接この語を借用したウイグル人マニ教徒が先に「法, 教義」の意味で *nwm* を受け入れ, さらに「聖典, 書物」の意味を定着させたことに注意すべきである, cf. Taqizadeh 1943, p.48; ED, p.777; Zieme 1975, pp.21, 82; 森安 1989, p.11; 森安 1991, p.201. ウイグルに代表されるパミール以東のトルコ人の間ではマニ教が仏教に先行するのであって, 決してその逆ではないことについては既に森安 1989, 第六・七節 (さらに Moriyasu 1990) で詳論した. マニ教には 7 種もしくは 9 種の重要經典があるが⁽¹⁷⁾, その他にも各種の聖典がある. 本文書の本体も, そのうちの 1 つであったのであろう.

nom の次のトムセンの読めていないところを *töläk* と推測して読んだが, これはまだ確実とは言えない. むしろ文脈的には *t ü k l* = *tükäl* 「完全に, 立派に」の方がよいが, 3 文字目は明らかに前舌音系の *l* であって *k* ではない. ただし前舌音系の *k* と *l* はよく似たストロークを持つから, あるいは単なる書記の誤りかもしれない.

(17) Cf. 石田 1925, pp.167-169; Haloun / Henning 1952, pp.204-210; Klimkeit 1982, p.1; Clark 1997, pp.91-92.

(18) Cf. Clark 1997, pp.92-105.

L8-9 : bitig の読みは一つの提案であるが、文脈から「文字」や「筆写」に関する何らかの語があったことは間違いないと確信する。次項参照。

L9 : yaviz ではなく yavuz が使われている。これまでに在証されている限りでは、この形は yaviz よりやや新しい, cf. ED, p.882; 森安 1991, pp.203-204. ここでは書記自身が、文字を清書する技術・能力について「悪い、下手な、拙い、無能な、悪(筆)な」という謙譲表現をしているに相違ない。敦煌出土のルーン文字俗文書には “bitgäci isiz yaviz qul bitidim” 「書記にして拙く悪筆の僕が書いた」とある。⁽¹⁹⁾ 同じく「悪い」という意味を持つ語 aýduq の “aýduq yanji (or qarji / umaz) bitkächi” 「悪くて若い(または年老いた／無能な)書記」と同じような用法と考えられる。因みにルコックからガバインに至るまでかなり長い間、この aýduq が人名とみなされていたが⁽²⁰⁾、その後この見方は完全に改められた、cf. Hamilton 1971, pp.49, 50, 51, 98; ED, pp.80-81; Hamilton 1971 に対する Gabain の書評, UAJ 45, 1973, p.307; Gabain 1973, p.73; UW, pp.62-63; Zieme 1981, p.90; 吉田 1991, p.61, n.11. しかるについ最近のクリムカイト氏やクラーク氏の著作でも相変わらず aýduq を人名とみなす誤りを犯しているのは、一体どういうことであろうか。

吉田氏が中世ペルシア語マニ教文書の中から対応する表現を発見した今となつては、人名説が息を吹き返す可能性は万に一つもない。また漢文文書にも「写手悪筆」という表現がある、cf.『敦煌石室写經題記与敦煌雜錄』上輯、一八葉。

(19) Thomsen 1912, pp.218-219 & pl.IIIB: MS.IV = Ch.00183 = Or.8212-77. ルーン文字の俗文書はきわめて珍しい。トムセンは本文書が ymä 「また」で始まるので、その前の部分が欠けた不完全なノートと考えているが、そうではない。ymä が手紙などによく使われる発語であることは今や周知の通りであり(cf. Hamilton 1986; 森安 1991, p.200), 私の考えでは、これは使者や役人・軍人などへの食糧支給に關係する首尾完全な文書である。トムセンは bægni を人名と誤解したが、正しくは「酒、ビール」の意である, cf. Pelliot, TP 15, 1914, pp.2-7; ED, p.328. 元代の首思・祇応の発給に係わる文書行政の先駆をなすものとして注目すべきである, cf. Pelliot, TP 27, 1930, pp.37-38; W. Kotwicz, Contributions aux études altaïques. RO 16 (1950), 1953, pp.350-353; 羽田 1957, pp.76-79. 本文書についてのさらに詳しい情報が後注39にあるので、参照されたい。

(20) Manichaica I, p.28; Manichaica III, p.43; Gabain 1949, pp.50, 55.

(21) Klimkeit 1993, pp.373-374; Klimkeit 1994, p.121; Clark 1997, p.106.

(22) 吉田 1993b, pp.132-133.

L10：トムセンがuzsuz “unskillful”と読もうとした語は、虚心に見ればwzrkである。パルチア語や中世ペルシア語のwzrg「大きい」から借用されたソグド語としてのwzrkの実例については、cf. 吉田 1993a, p.123. この読みが確定できた意義は大きい。一方、pwγwrの読みにはまだ多少の不安が残るが、人名要素であることは疑いあるまい。吉田氏によれば、pwγwrはソグド文字表記のパルチア語pxwr（パルチア語puhr「息子」）に当たるものであり、2つめのwはソグド語特有のwのmetathesisによって説明されるだろうという、cf. Gershevitch 1954, §§406-429. ソグド語のxをトルコ語ではγを使って写すことについては、cf. Thomsen 1910, p.298; Andreas 1910, pp.310-311. Puhrはマニ教徒の人名要素としてよく使われる、cf. Sundermann 1994, pp.256, 258, 261, 262, 263.

L14-15：トムセンの読んでいないところを、ävijä「彼の家へ；その家のために」と読んでおく。

5. 文書の内容とミニチュール

本文書は、冊子本形式であること、片面にミニチュールが描かれていること⁽²³⁾、もう片面には寄進者たちの名称が列挙され、寄進者の代表的人物の依頼で本文書（マニ經典）を書くに至った経緯、並びに書記（書写人）の名前が書かれていることなどから判断して、マニ經典のコロフォン（奥書、跋文）であることはほぼ間違いない。他のマニ經典のコロフォンにも、本文書と同様に赤黒2色のインク（朱・墨）で交互に書かれているものや、内容・構成などの類似するものが散見されるが、特に中世ペルシア語で書かれたMahrnāmagのコロフォン

(23) グラーチは、トゥルファン出土文書のうち冊子本形式でミニチュールや装飾のあるものは「全て」マニ教文献であるという (Gulácsi 1997, pp.194, 197) が、これもその例外ではない。

(24) トムセンの“a fragment of a legend or tale concerning the conversion to Manichaeism of one Prince Singqur”という説明も、それに引きずられたエシンの解釈 (Esin 1976, p.53) も誤りである。

(25) Cf. Müller 1912, pp.208, 210; Müller 1913, pp.7-17, 38; 森安 1991, pls.XVIII-XXII; Sundermann 1992, pp.71-73; Clark 1997, Nos.145-146, 149-154.

は、言語こそ違え、最も比較に値する。残存しているのはもともと冊子本であった *Mahrnāmag* の複葉 1 枚（4 頁分）で、そのカラー写真を見れば一目瞭然なように、左右のマージンの幅の広い方が外側、狭い方が内側の綴じしろである。そして上方に、本文と異なる色のインクで書かれた見出しがある。これと比べてみれば、我々の Kao.0107 が、やはり元来は冊子本を形成していた複葉 1 枚の片割れであることが容易に推測されよう。左側のマージンに植物文様（おそらくザクロ）⁽²⁶⁾が残っていることも、その傍証となる。またテキストの内容はコロフォンなのであるから、これが本文の最後の頁で、その裏側にミニアチュールが描かれていたと考えられる。おそらくこのミニアチュールは右から左へ頁が進む冊子本形式の經典全体の裏表紙を飾っていたのであろう。ミニアチュールは本文とは向きが 90 度ずれているが、それはマニ經典ではきわめて普通に見られる現象といってよい。ただしその理由は不明である。

ミニアチュールの主題については、今のところこれといったアイデアはない。しかし中心人物が左の台座の上に座っている白衣白冠のマニ高僧と、それと対話する形のマニ僧との 2 人であることは疑いない。もしかしたら、単に対話しているのではなく、高僧が箱のようなものに入った聖典か何かを右の人物に手渡そうとしている場面かもしれない。このマニ高僧の白衣には赤い縁飾りがあり、白冠には先端が尖った三叉状の飾りが付いており、さらにその光背は、マニ教では非常に重要な意味を持つ太陽と月を模した特異な形状をしている。実際、これと全く同じ日月型の光背を持ち、やはり赤い縁飾りのある白衣と三叉状飾りのある白冠を身に着けた高僧が、トゥルファン出土の壁画（Le Coq 1913, pl.I in color; Le Coq 1923, pl.1 in black and white）⁽²⁷⁾に見られる。それは高昌故

(26) ミューラー以来長らく「序文」と考えられてきたものが実はコロフォンであることは、ズンダーマンによって確定された、cf. Sundermann 1992, pp.71-72.

(27) 森安 1991, pls.XXI-XXII.

(28) Cf. Gulácsi 1997, p.197.

(29) Cf. Le Coq 1923, pls.7, 8; Gulácsi 1997, p.192.

(30) Cf. Gulácsi 1997, pp.192-193.

(31) Cf. Klimkeit 1982, p.29.

城の遺跡 K という複合建築址の中央ホールから出土したものであるから、もし本稿冒頭の私の考察が正しいならば、両者は同一のマニ教寺院から発見されたことになる。壁画の方の中心人物は、その背後にたくさんの白衣白冠のマニ教僧侶を従えていて相当な高僧であったことを伺わせる。これを開祖マニとみなす説には到底賛成できないが⁽³²⁾、教団最高位のモジャク (možak, 慕闍) ⁽³³⁾ が第二位のアフタダン (aftadan, 拂多誕) とみなすことは許されよう。森安 1991, pl.XVIIb & p.29 で見たように、ベゼクリク出土のソグド語書簡の宛名部分のミニアチュールに描かれた三叉状飾り付きの白冠が、モジャクの象徴であった事実から敷衍すると、同じような三叉状飾りの付いた白冠をかぶる遺跡 K の壁画の中心人物もモジャクであるとみなすのがよいように思われる。Pl.IV に復元したように、Kao.0107 の高僧の白冠にも、三叉状飾りがあったと推測されるので、これまたモジャクである可能性は高くなろう。さらに両者とも長大な額髪を蓄えている点にも注目すべきである。

6. 古文字学・古文書学・歴史学的研究

では次に、本文書の年代について考察するために、まずトゥルファン出土のマニ教関係文書(パルチア語・中世ペルシア語・ソグド語・ウイグル語・クチャ語・バクトリア語・漢文)全体の年代について、従来の見方をまとめてみよう。

- 1) ある者はこれを東ウイグル可汗国時代(8世紀後半~840年)のものと言い、
- 2) ある者はこれをウイグルの西遷以後の9世紀後半~10世紀の西ウイグル王国時代前期のものと言い、3) またある者はその一部を13世紀のモンゴル時代にまで下るとみなしている。4) さらには漠然と9~10世紀とする者もある。1) は 9

(32) Cf. Klimkeit 1982, pp.28-29; Ebert 1994, pp.21-22. エバート女史は、件の三叉状の冠飾りを、イエスの殉教をマニの殉教になぞらえるマニ教徒がイエスの荘冠にならって作り出したもので、これを着ける人物をマニ自身とみる。その際、これを着ける人物が「白髪」である点にも注目して、その傍証としたいようであるが、遺憾ながら Kao.0107 の人物は立派な黒髪である。

(33) 森安 1991 への書評で吉田氏がこの考えを表明している、cf.「史学雑誌」102-4, 1993, p.113.

世紀後半以降の西ウイグルでは仏教が盛んになるからという単純な理由からかなりの支持を得たが、10世紀にもマニ教教団が国家的保護を受けていることが明らかになった今ではもはや問題にならない。これに対して2)はおそらく、8世紀末に中央アジアの覇権をかけて繰り広げられたウイグルと吐蕃との北庭(ビシュバリク)争奪戦の勝者は吐蕃であり、世界で唯一マニ教を国教的地位に置いたウイグルの影響力は、東ウイグル可汗国時代にはトゥルファンに及ばなかつたと考えられたからであろう。しかし北庭争奪戦の勝者がウイグルであったことは、これまで私が繰り返し主張してきた通りである。⁽³⁴⁾また3)についても私は否定的見解をとり、西ウイグル王国では10世紀末から11世紀初頭にかけてマニ教の勢力は急激に衰え、仏教にとって代わられたと推定している。それ故、トゥルファン出土のマニ教文書は、まずは8世紀後半から11世紀初頭までの間に編年付けるところから出発してよいであろう。⁽³⁵⁾結果的には、4)の9~10世紀説とほぼ同じになる。

次に、ほとんどがマニ教徒に属するトゥルファン出土ルーン文字文書の年代について考察する。

ルーン文字で書かれた突厥の諸碑文、キルギスのエニセイ銘文、タラス銘文、ウイグルのタリアト・シネウス・テス・カラバルガスン碑文、そしてトゥ

(34) 森安 1991, 第3章全体。

(35) 森安 1973; 森安 1979; Moriyasu 1981; 森安 1991, p.31, n.94. この説は安部 1955 を発展させたものではあるが、安部説を単に踏襲するものではない、cf. 後注72.

(36) 森安 1991, 第3章第4節。私はトゥルファン出土マニ教文献の下限を11世紀初頭に置いたが、ズンダーマンもほぼ同じ考え方である、cf. Sundermann 1992, p.69; Clark 1997, p.96, n.26.

(37) Cf. Gulácsi 1997, p.102.

(38) Cf. Le Coq 1909, p.1048; Gabain, ATG, p.9; Clauson 1962, p.72; Sertkaya 1985, p.139; Clark 1997, p.109. とりわけガバイン・クローソン両氏はトゥルファンだけでなくミーラーン・敦煌出土品も含むルーン文書全体につき、そのほとんどがマニ教徒集団に関わるものという。さらにクラーク氏は、トゥルファン・敦煌出土のルーン文字文書で、素性の判明したものは「全て」マニ教文献であるという。これらの言い方では、有名なサイコロ占いの *irq bitig* (cf. Thomsen 1912, MS.II; Hamilton 1975; Tekin 1993; Clark 1997, No.198) や古代トルコの格言集 (cf. Hamilton / Bazin 1972) や、仏典である『天地ノ

ルファン・敦煌・ミーラーンから出土したルーン文字文書群を、歴史学と古文字学の双方から検討しているトルコ学者の間では、ルーン文書をルーン文字資料全体の最後に編年するのが一般的である。エニセイ銘文とタラス銘文はさておき、あとの三群については、①8世紀前半の突厥碑文、②8世紀中葉～9世紀前半のウイグル碑文、③10世紀のものを含むルーン文書の順に編年すること

↗ 八陽神呪經」の裏に記入された短いコロフォン (TTT, VI, p.97) までマニ教文献ということになってしまふので、全面的には首肯できない。しかしながら、ルーン文書が作成された9～10世紀前後(本節の結論を先取り)という時代は、ウイグルをはじめとする古トルコ民族の間ではまだ仏教はそれほど盛んではなく、マニ教が優勢であったとするのが私の年來の主張である(森安 1989; Moriyasu 1990; 森安 1991)から、当然ながら私もルーン文書の多くはマニ教的環境のもとで作成されたとする通説に基本的に賛成である。今、マニ教徒のものとするのに疑念があると指摘した3点はいずれも敦煌出土品であるから、「トゥルファン出土」のルーン文字文書に限定すれば、そのほとんどがマニ教徒によって書かれたとする説に、敢えて反対する理由はない。Müller/Lentz 1934, p.548には、ソグド語仏典の裏にわずか2語のルーン文字トルコ語の「コロフォン」があると紹介されているが、吉田氏によればこのソグド仏典は8世紀のものであり、従って裏のルーン文字は単なる「落書き」であろうという。

(39) ロンドン大英図書館所蔵の漢文文書の裏にある古代トルコの格言集 (Thomsen 1912, MS.III = Ch.0014 & Ch.0053 = Or.8212-78 & 79) が10世紀中葉～後半に書かれたものであることは、ハミルトン・バザン両氏によって見事に論証された、cf. Hamilton / Bazin 1972, pp.27-28. サイコロ占いの書 *irq bitig* (Thomsen 1912, MS.II = Ch.0033 = Or.8212-161) についても、9世紀初めとみたトムセン説よりも、10世紀とみるバザン・ハミルトン説が正しいであろう、cf. Thomsen 1912, pp.195-196; Bazin 1974, pp.294-296 = Bazin 1991, pp.235-237; Hamilton 1975, p.13. さらに同じく敦煌出土の俗文書(前注19で紹介した Thomsen 1912, MS.IV = Ch.00183 = Or.8212-77)については、トムセンは9世紀のものとした(Thomsen 1912, p.219)が、これまたもっと遅く年代比定すべきである。なぜなら、私がロンドンで原物を実見したところ、その背面はチベット文の「般若心経」であり、こちらの方が本来の表面であると判明したからである。この「般若心経」は、あらかじめ左右の界線とチベット文字の上端を揃えるためのガイドラインを引いた後に書写されたもので、38×24.5cmの用紙全体を使っており、冒頭は“rgya-gar skad-du a-rya prad-ña pa-ra-myi-ta hri-dya’ // bod skad-du ’phags-pa shes-rab-gyi pha-rol-tu phyin-pa’i sñiñ-po bam-po gčig-go /”で始まり、末尾には“liñ-hi lha-’dus bris”「令孤 Lha-’dus が書写した」というコロフォンまである。形態のみからもこれは9世紀前半の吐蕃による敦煌支配時代の正式写経と考えてよい(cf. Lalou 1939-1961, Nos.87, 101, 448-496, 1051, 1264-1282; Poussin 1962, Nos. 117-121; 上山 1965)が、紙も色は chamois α, 粗い漉き綿のあるやや不均質な中質紙で、吐蕃支配期ないしそれに続く沙州帰義軍期の紙として普通のものである。さらに幸いなことに本経の写経生は、パリ国立図書館所蔵敦煌文

自体、決して間違いではない。とくに歯擦音 /s/, /š/ を表わす文字 s, š, S, Š, Š(前掲の文字表に対応)の生成発展の過程だけに着目してみても、このことは十分に証明される。ローナタシュ氏が手際よくまとめた通り⁽⁴⁰⁾、突厥碑文時代には歯擦音 /s/, /š/ を表わす文字はやや錯綜していたが、ウイグル碑文時代には文字 s で前舌音系列の /s/, /š/ を、文字 Š で後舌系の /s/, /š/ を表わすように収斂し、ルーン文書でも基本的に同じやり方が行なわれた。さらに文書の時代においては、かつてルコックが指摘したように⁽⁴¹⁾、特に外来語(主に中世イラン語のマニ教用語)中の š を明示するために、文字 s と Š に一点を付けた š, Š を考案し、理論的には前舌系と後舌系の s, š の都合四者を区別できるようになったのである。⁽⁴²⁾これを文字発展の最後の段階とみると、誰しも異存はない。

↗ 書のチベット語大般若經典 *Pelliot tibétain* 1420 の中に写経生として現われる令孤 (leñ-ho) Lha-'dus (cf. Lalou 1939-1961, III, p.51) と全くの同一人物である可能性さえある。

武内氏の研究によれば、令孤 Lha-'dus のように姓は漢姓で名のみチベット語になっている人物が輩出するのは、790年代から9世紀中葉まで続く吐蕃支配期でも後期のことである、cf. Takeuchi 1995, p.131. 以上のような理由により、反故となった仏典の裏面(の一部)を再利用して書かれたルーン文字俗文書が、9世紀前半にまで遡ることはありえない。反故紙になるまでの時間を考慮すればやはり10世紀のものとみるのが妥当な線であり、どんなに早くても9世紀後半である。他方、バザンは全く別の観点からこのルーン文書の年代を10世紀前半と推定している、cf. Bazin 1974, p.293 = Bazin 1991, p.234. 因みにエルダルによる古トルコ語文献の編年によれば、トムセンの MS.II (irq bitig) と MS.IV とは Group I, MS.III は Group I-II に属する、cf. Erdal 1979, pp.160-162.

(40) ロンドンに所蔵されるミーラーン出土ルーン文書(Thomsen 1912, MS.I = M.I. xxxii, 006 = Or.8212-76)を、吐蕃の中央アジア支配以前のものとみて、これを8世紀半ばより早い時期に紀年づけるトムセン説(Thomsen 1912, p.185)は、今や完全に過去のものである。

(41) Róna-Tas 1991, p.60.

(42) ただし例外も見られる。シネウス碑文には -miš 以外の例外はないが、タリアト碑文にはやや多く例外的用法が散在するので、このようなまとめ方はあくまで原則である。

(43) Le Coq 1909, pp.1054, 1059.

(44) ただし中世イラン語にはトルコ語のような前舌・後舌の区別はないから、[š] 音を表記するためには š, Š のいずれかが場合に応じて使われたと思われる。語注 L2/14 で指摘したように、本文書の NGWšk が、別文書では NGWŠk とか NWGWŠk と書かれていた。この例などはそのような推測を支持するのではなかろうか。

ルーン文書全般についてクローソンは9世紀頃とするのが一般的見方だとするのに対し、ローナタシュは、トゥルファン出土ルーン文書を、840年にキルギスに攻撃されて後、⁽⁴⁵⁾ モンゴリアから天山地方に移動してきたウイグル人たちが残したものと信じて疑わない。⁽⁴⁶⁾ ローナタシュのような立場からすれば、ウイグル碑文とルーン文書とは時代的に截然と区別され、事態は単純になり、且つトゥルファン出土ルーン文書の年代も狭められるが、北庭争奪戦の勝利者をウイグルとする私の立場からは、そう簡単には言い切れない。東ウイグル可汗国第3代の牟羽可汗(在位759~779年)がマニ教に改宗したといわれる762/763年頃ならばいざ知らず、少なくとも8世紀末以降の東部天山地方(北庭~トゥルファン~カラシャール地方)には東ウイグル可汗国の勢力が及び、あの有名なMahrnāmagに示された通り、マニ教徒になったウイグル人高官も相当数いたのであるから、彼等のためには勿論、モンゴル本土のウイグル人マニ教徒の貴族や高官のためにも、トゥルファン地方でルーン文字のマニ教関係文書が書写されても何ら不思議ではないからである。文字 s, š, S, Š の四者を区別する書法上の発明が、上記の②の中でも主要なタリアト・シネウス・テス碑文の作成された8世紀中葉にまで遡ることはありえないが、8世紀末以降ならば、トゥルファンにいた書記集団によって、モンゴル本土とは独自に新たな工夫が行なわれた可能性まで否定することはできまい。換言すれば、ローナタシュのように事態を単純化することはできないのである。

既にトムセンは、820年代のカラバルガスン碑文のルーン文字が、突厥時代のものより丸味を帯びて優美になっており、それがトゥルファン出土ルーン文書の文字と同じ特徴であることを見抜いていた。そして、そのような特徴は石に刻んでいたルーン文字を紙にペンや筆で書くようになって生じたものと考え、トゥルファン出土のルーン文書の一つを820年代のカラバルガスン碑文より早

(45) Clauson 1962, p.72.

(46) Róna-Tas 1991, p.60. 庄垣内正弘氏も同じ見解である, cf.「突厥文字」月刊『しにか』8-6, 1997年6月号, p.55.

(47) Müller 1913; 安部 1955, pp.217-220; 森安 1979, pp.211-215.

く、およそ800年頃のものと紀年づけた。個別具体的にこの文書を800年頃のものと断定することには躊躇を覚えるが、⁽⁴⁸⁾ トゥルファン出土ルーン文書の文字とウイグルのカラバルガスン碑文のそれとを結びつけた点は高く評価されてよい。確かに両者はきわめてよく似ているのである。⁽⁴⁹⁾

実はトゥルファン出土のマニ文字トルコ語文書の中に、/s/, /š/ を区別せず、両方とも文字 s で表記しているものがいくつか存在する。⁽⁵⁰⁾ 古トルコ語全般としてみれば音素としての /s/, /š/ の区別が存在し、マニ文字では両者は別の文字で示され、他の多くのマニ文字トルコ語文書ではそれが正確に反映されているから、これらは例外である。しかしながら、この例外的なマニ文字文書の中でも、中世イラン語から借用したマニ教用語中の š の場合は、これを正しく š の文字で表記している。ということは、これらの文書の作成者は、[s] と [š] の発音の区別を知らなかったわけではなく、トルコ語の方にこの区別の必要を認めなかつたということになる。とすれば、この例外的な文書の書き手の使っていたトルコ語の一「方言」では、音素としての /s/, /š/ の区別が無くなっていたことを示唆する。勿論この「方言」とは、トルコ語の中のある方言であっても、さらにその中の小集団の方言であってもよく、あるいは単なる時代差であってもかまわない。

ところで最近、クィズラソフ氏は、かつてルコックによって学界に紹介され

(48) Thomsen 1910, pp.300-301.

(49) ルーン文書のルーン文字はだいたいいずれも優雅であるが、トムセンが紹介したこれは優雅さに欠ける。バザンも、特に根拠は示していないが、9世紀と見ている、cf. Bazin 1974, p.315 = Bazin 1991, p.249. しかし、エルダルの編年では Group II に入れているので、9世紀に編年するのは相当に苦しい、cf. Erdal 1989, p.165. 本文書の書体は、一見古そうに見えるが、前注39で10世紀（どんなに早くても9世紀後半）と判定したトムセン紹介の MS.IV に近い。一方、本文書には後舌系の /š/ を表わすために、š とも異なる特殊な形の文字(?)を使用している。しかもそれは中世イラン語の /š/ ではなく、ウイグル語の /š/ を表わしている、cf. Thomsen 1910, p.298.

(50) Cf. Klyashtorny 1985, p.156: Paleography of the Uighur Runiforme Monument. カラバルガスン碑文のルーン文字については Atlas, pl. XXXV を参照。

(51) ATG, p.55; Zieme 1975, p.30, footnote 3.

たルーン文字の発音をマニ文字で記した対照リストの断片と、『西域文化研究』第4巻(京都1961)図版第二九として写真が発表されて以後ほとんど注目されてこなかった大谷文書Ot.Ry.8129とを取り上げ、長らく謎に包まれていたルーン文字アルファベット⁽⁵²⁾の配列を見事に復原することに成功し、その結果、上記の2文書がいざれもルーン文字アルファベット表の一部であることが判明した。⁽⁵³⁾ その成果によれば、ルーン=マニ文字対照形式の表では、本来後舌音系列語に使われる文字 Š が来るべき位置(ルコックの表の15番目；クイズラソフの復原アルファベット表の26番目)に正しくその文字 Š が入っているが、それに対応するマニ文字は "s" となっている。これは発音が [s] であることを表示しているのである。一方、トヨク出土といわれる Ot.Ry.8129 では不完全なアルファベット表が3つ並んでいる(クイズラソフによれば P1, P2, P3)⁽⁵⁴⁾が、P2 では本来なら後舌音系の文字 S が来るべき位置(クイズラソフの復原アルファベット表の16番目)に文字 Š が入っているのである(P3 では正しく S 字が入っている)。この2つの事実は、後舌音系の文字 S, Š が混同され、発音上も [s] に同化してしまっていたことを明示するものでなくてなんであろう。

ここで我々はもう一度、ローナタシュによってまとめられたウイグル碑文の

(52) Le Coq 1909, p.1050 and pl.IX.

(53) Clauson 1962, pp.80-81.

(54) Кызласов 1994, pp.105-142. 本書の概要是1995年8月に長野県で行なわれた白馬合宿において大澤孝氏により紹介された。

(55) Кызласов 1994, p.125.

(56) Кызласов 1994, pp.107-108. P は Rюkoku (Ryūkoku) の頭文字。これらのアルファベットは漢文仏典の裏に書かれたものである。ここに龍谷大学大宮図書館の許可を得て、初めて表裏の写真を併せて掲載する(Pls. V & VI)。また、この仏典は『大般涅槃經』(大正新修大藏經、第12巻、No.374, p.453, c.18~24; No.375, p.695, c.26 ~ p.696, a.4)であることを、古泉圓順氏より御教示いただいた。龍谷大学並びに古泉氏に対し心より感謝する。原文書を調査したところ、漢文面を表と見て縦横17×11cm、上端のみ完全に残存、紙色は beige rosé ~ beige、漉き縞はほとんど見えず均質、紙厚は中手、中上質のしっかりした紙である。漢字の書体は唐代の楷書で、藤枝氏の言う C に当たる(cf. Fujieda 1991, p.157)。紙質と書体とから判断して、漢文の書写年代は8世紀前後であると思われる。勿論、裏のルーン文字アルファベットはそれより後のものである。

歯擦音の正書法に思いを巡らそう。そこでは前舌音系の /s/, /ʃ/ が文字 s で、後舌音系の /s/, /ʃ/ が文字 Š で表わされていた。これは前舌系と後舌系との違いは明記するが、それぞれの中での /s/ と /ʃ/ の区別は必要ないと認識されていたことを意味しているに違いない。⁽⁵⁷⁾ 偶然残された2種類のルーン文字アルファベットは、これを強力に支持してくれる。そうであれば、先の一「方言」とは他ならぬウイグル語、しかも東ウイグル時代にウイグル碑文の作成に関与した書記集団のウイグル語である可能性がきわめて高くなる。第4節の語注 (R12, L2-3 / 10-11) に指摘したような事実も、この方向で難なく説明できる。

トゥルファン出土ルーン文書のほとんどはマニ教徒の残したものというがルコック以来の一般的な見方であり、前注38に述べた通り私もそれに賛成であるが、そのマニ教徒とは一体何者であろうか。この点では私は、ウイグルをはじめとするトルコ人にマニ教を普及させたのはソグド人であり、初期の段階で中世イラン語から古トルコ語に翻訳したり書写したのは、トルコ語のできるソグド人であったとするクラーク説を支持したい。⁽⁵⁸⁾ 上に言及したルーン文字アルファベットとマニ文字を対照した一覧表は、ルコックの推定した通り、⁽⁵⁹⁾ マニ文字に慣れ親しんでいたソグド人マニ教徒が、トルコ人の間で使われていたアルファベットであるルーン文字を学習するためのものと考えるのが妥当であろう。⁽⁶⁰⁾ そしてそのルーン文字とは、やはり当時のウイグル碑文で使われていたも

(57) ただしローナタシュはこのような「ゆれ」を正書法の「ゆれ」とみなし、音素の区別が無くなっていたからとは考えない、cf. Róna-Tas 1991, p.61。この点では我々と立場を異にする。

(58) Clark 1997, pp.95-96. 既にトムセンも、論証抜きではあるが、ソグド語が中央アジアのイラン人マニ教徒の日常語であったと述べていた、Thomsen 1910, p.300。

(59) Le Coq 1909, pp.1049-1050 and pl.IX.

(60) バザンはこの対照アルファベットを論証抜きで8世紀末のものとみる、cf. Bazin 1974, p.314 = Bazin 1991, p.249。私はもう少し幅を広げて8世紀末～9世紀前半と見る方が無難だと思うが、東ウイグル可汗国時代のものと見た点を評価しておきたい。この文書の表の漢文仏典の書体がやや古く見える (cf. Le Coq 1909, pl.IX) のも、その傍証となろう。

のであったと考えてよからう。なぜなら、ローナタシュが指摘した通り⁽⁶¹⁾、歯擦音を表わす文字の使い分け方に着目すれば、ルーン文書は突厥碑文よりもウイグル碑文にはるかに近いからである。それゆえ今後は、ルーン文字文書の古トルコ語については、突厥語を含まないという意味を込めて「ウイグル語」と限定することにする。

こうしてルーン文字を習得したソグド人マニ教徒が、自家薬籠の中世イラン語マニ經典をルーン文字で音写したり、ウイグル語との二言語併用テキストを作成したり、純粹にウイグル語だけのテキストを作成したりして⁽⁶²⁾、布教活動に努めたのである。勿論、最初期を除けば、これらのルーン文字マニ教文書の作成者の中に、既にマニ教徒となり、典礼用語としてのソグド語さえ習得したウイグル人が混じるようになることも十分予想される。いずれにせよ、ほぼ全てがマニ教徒の手になるトゥルファン出土のルーン文書の場合は、8世紀後半～11世紀初頭をわずかに狭めて8世紀末～11世紀初頭とすることしかできないが、実際にはウイグルにまだ仏教の影響が及んでいなかった8世紀末～9世紀に重心を置いて考えてよいであろう。⁽⁶³⁾

これに対して、*irq bitig* を含むロンドン所蔵の敦煌文書中のルーン文書の場合は、前注38・39で見たように、確かに10世紀前後のものが多いと思われる。敦煌・ミーラーン・コータンという河西～西域南道地方にウイグルの直接の影響力が及び、その地域にさまざまのウイグル文書が残されるようになるのは西ウイグル王国成立後で、しかも西ウイグルと沙州帰義軍政権とが親密になる時代のものであるというのが、ハミルトン氏と私とが折にふれ繰り返し論じてきたところである(文献目録参照)。であるから、今や「ウイグル語」であることが決

(61) Róna-Tas 1991, p.60.

(62) Cf. Le Coq 1909; Sertkaya 1985, pp.136-137; Clark 1997, pp.95, 98 (n.36), and the list. 中世ペルシア語とウイグル語との二言語併用テキストの実例は、cf. Le Coq 1909, pp.1052-1054 = Clark 1997, No.74.

(63) 西ウイグル時代初期(9世紀後半)のウイグルはまだほぼ完全なマニ教世界であるというのが、私の基本的考え方である、cf. 森安 1989, esp. pp.15-21; Moriyasu 1990; 森安 1991, pp.31ff., & 第3章第3～4節。

定した敦煌のルーン文書が10世紀中心のものであるのは、いわば当然である。また、10世紀にシフトしているからこそ、注38に述べたようにマニ教徒に限定されない内容のものや、ウイグル仏典の裏のコロフォンと思しきものまで出現するのである。

先に言及したように、東ウイグル可汗国第8代の保義可汗の紀功碑であるカラバルガスン碑文のルーン文字は、突厥時代のものより丸味を帯びて優美になっており、その点も含めてトゥルファン出土ルーン文書(さらには敦煌・ミーラーン出土品も含むルーン文書全般)に見られる文字と実によく似ている。しかるに同じウイグル時代でも第2代の葛勒可汗(磨延啜)の紀功碑であるタリアト・シネウス碑文、並びに第3代牟羽可汗時代初期に作られたテス碑文のルーン文字は、⁽⁶⁴⁾まだまだ突厥時代のそれに近く、またキルギスが東ウイグル可汗国を崩壊させた直後にモンゴリアに立てたスージ碑文⁽⁶⁵⁾でもそうなのである。ということは、突厥からキルギスに伝わり、石に刻み続けたルーン文字の場合は、100年以上経っても書体にそれほど大きな変化は起らなかったということである。⁽⁶⁶⁾であれば、ウイグルにおいてタリアト・シネウス・テス3碑文からカラバルガスン碑文までの約70年間に、あれほど大きな書体の変化が生じた背景には、何か特別の事情のあったことが予想される。この間のウイグルに起こった特別の変化としては、言うまでもなくマニ教の導入が第一に挙げられる。ここに至って私は、従来明らかになっている点に本稿で述べてきたところを重ね合

(64) Cf. Klyashtorny 1985, p.156.

(65) Cf. Ramstedt 1913, pp.1-9 & pl.I; Bazin 1990, pp.144-145. 私は、スージ碑文にマニ教僧侶が現われるという従来の読み方を排し、私のコメントも受け入れて、本碑文を840年にウイグルに進入したキルギス人が立てたものであるとするバザン説を支持する。これ以前に護氏は、スージ碑文の建設者をイル=オゲシ(il ögäsi, 頽于迦斯; 懿信可汗の即位前の称号)とみる説を提唱している(護 1975)が、これには従えない。

(66) セヴレイ碑文を、クリヤシュトルヌイ氏のように牟羽可汗のものとみなすのではなく、むしろカラバルガスン碑文より新しい時代のウイグル碑文であると考える護説を探るならば、ウイグルにおいても石刻用ルーン文字の書体に大きな変化は起らず、ただカラバルガスン碑文のみが孤立した特徴を示しているとみなせるのかもしれない。cf. 護雅夫(評)「クリヤシュトルヌイ、リフシツ共著『セヴレイ石碑』」『東洋学報』55-4, 1973, pp.109-120.

わせ、さらに先のトムセン説を生かす形で、次のような推定をしてみたい。

762 / 763年頃に牟羽可汗がマニ教に改宗したという噂が中央アジア～中国に広がると、特に天山周辺のオアシス都市に少しづつ拠点を構えつつあったマニ教徒の間に歓喜の輪が広がり、焉耆のマニ寺でほぼ同時期に始まっていたあの ⁽⁶⁷⁾ *Mahrnāmag* の編纂に拍車がかかり、トルファン地方でも中世イラン語のマニ經典をウイグルのルーン文字で音写したり、ルーン文字ウイグル語に翻訳するような動きが高まった。勿論このルーン文字をモンゴリアからトルファン地方へ伝えたのは、前代の葛勒可汗(磨延啜)の時代からウイグルと結び付いていたソグド人に違いなく、牟羽可汗の宮廷と深く係わるようになったソグド人たちは必要に迫られてウイグル語にも通じるようになっていたであろう。新たに建設されたオルドゥ=バリク(その遺跡をカラバルガスンと呼ぶ)には多数のソグド人ないしマニ僧が居住していたに相違ない。⁽⁶⁸⁾ しかし牟羽可汗のマニ教への傾斜はいささか性急すぎたため、治世末年には反マニ教勢力のクーデターを蒙り、その側近及び九姓胡(ソグド人)併せて約二千人とともに殺された。⁽⁶⁹⁾ その結果、中央アジアのマニ教徒の熱狂も一旦は下火になり、例えば *Mahrnāmag* の作成も中断された。しかしウイグルが吐蕃との北庭争奪戦に勝利し、795年に即位した第7代懷信可汗の時代になると、ウイグルにおいてマニ教徒ないしソグド人の勢力は復活し、マニ教は「国教」的地位を獲得するに至った。⁽⁷⁰⁾ そしてウイグ

(67) Cf. Müller 1913, pp.36-37; 安部 1955, p.218; Boyce 1960, p.1; Boyce 1975, p.52; 森安 1979, p.212; Sundermann 1992, p.71.

(68) セレンゲ河畔のバイバリク Bay Bāliq 即ち「富貴城」建設には漢人と並んでソグド人が参画していたことが、シネウス碑文から明らかになった、cf. Ramstedt 1913, pp.39, 62; 田坂 1941, pp.195-196.

(69) Cf. 田坂 1941, pp.200-203, 215-220.

(70) ウイグルに反マニ教的クーデターがあったという事実を明らかにしたのは田坂興道氏の功績である、cf. 田坂 1940.

(71) 通説では 762 / 763年の牟羽可汗の改宗からマニ教はウイグルの国教となったと言われるが、それは正しくない。国教と呼べるようになるのは懷信可汗時代以後である。これについては「東ウイグル帝国の摩尼教に就いて」と題する卒業論文で論じたが、未発表である。cf. 森安 1979, p.234, n.50; 森安 1991, p.32.

ルの本拠地であるモンゴリア本土と、ウイグルの勢力圏に入った東部天山地方との人的交流はますます盛んになり、トゥルファン地方を中心にルーン文字を使ったマニ教文献の制作も飛躍的に増大した。こうして頻繁に紙にペンや筆で書かれるようになったルーン文字の書体は、石刻の場合に比べてはるかに丸みを帯び、優雅な形へと変化したのである。そして第8代保義可汗時代になつて、⁽⁷²⁾ *Mahrnāmag* はようやく完成し、またオルホン河畔の首都オルドゥ=バリクに、あの突厥のキヨル=テギン碑文をも凌駕する堂々たる巨碑であるカラバルガスン碑文が建てられたのである。私の考えでは、ウイグル語・ソグド語・漢語という当時の中央アジアを代表する3種の言語で記された本碑文は、単に保義可汗並びに先代懷信可汗の紀功碑であるだけでなく、実は牟羽可汗以来のウイグルにおけるマニ教普及の顯彰碑としての性格を色濃く持っている。⁽⁷³⁾ その実証は別の機会に譲るが、それ故に本碑文のルーン文字部分は東部天山地方で発展した文書用ルーン文字に慣れ親しんでいたマニ教徒が担当することになり、その結果としてルーン文書とカラバルガスン碑文のルーン文字とが同じになったのであろう。

結局、トゥルファン出土のマニ教ルーン文書の年代は9世紀に重点を起しつ

(72) Cf. Müller 1913, pp.9, 29-30; 安部 1955, pp.218, 222, 226; Boyce 1960, p.1; Boyce 1975, p.52; 森安 1979, p.212; Sundermann 1992, p.71. 私は *Mahrnāmag* の完成を第10代昭礼可汗の時とする通説に反対である。安部氏も保義時代説に傾いているが、その論拠は私とは全く相容れない。森安 1973 & 1979, Moriyasu 1981において私は8世紀末の北庭争奪戦の勝者をウイグルとする安部説を継承発展させたが、これらの拙稿は、9世紀前半に再びトゥルファン地方が吐蕃の手に落ちたという安部氏らの通説を覆すものであった、cf. 森安 1991, p.31, n.94. ここに森安説と安部説の決定的違いがある。

(73) カラバルガスン碑文については、1994年に私費で予備調査を行なった後、1996年からは文部省の科学研究費により日本モンゴル双方の研究者と合同で現地調査に当たっている。新たな知見も得られているが、詳細はいずれ刊行予定の報告書で発表するつもりである。

(74) 碑文の内容からそのように言える。100年前のラドロフ探検隊の時点で、既にルーン文字ウイグル語面は破損が激しく、意味の通じる箇所は少なかったが、漢文面とソグド語面はまだかなりよく保存されていた、cf. Atlas, pls.XXX-XXXX. 漢文版については羽田 1957, pp.305-310 が、ソグド語版については吉田 1988, pp.32-40 が、現在利用できる最良の校訂テキストである。

つも8世紀末～11世紀初頭より以上に限定することはできなかった。その点ではおおまかに9～10世紀とみる説と変わりばえなさそうである。しかし、実は最近の研究者が9～10世紀と言う場合、多くは9世紀後半からの西ウイグル王国時代のみを念頭に置いているのである。これに対して私は8世紀末～9世紀前半の可能性を決して排除すべきではないと考えているのである。

従ってKao.0107の年代についてもおおまかに9～10世紀前後とせざるをえないが、本節で述べたような状況証拠から判断すれば9世紀前後に属する蓋然性が高く、さらに紙質から判断するならば、その前半の東ウイグル時代にまで遡ることは十分あり得るということである。ズンダーマン氏によれば、西イラン語の単語を組み合わせた名前はマニ教徒の「法名」であるというから、Wzrk Pwywr⁽⁷⁵⁾はソグド人であってもウイグル人であっても構わない。もし本文書が8世紀末～9世紀前半のものであるならば、その筆写人であるWzrk Pwywrはソグド人であろう。しかし、もしそれ以後のものならば、ウイグル人マニ教徒であったかもしれない。状況証拠と紙質だけではまだ根拠が弱いため、今は前者の可能性が高いとしておき、その最終的判定は今後の研究に委ねたい。

文献目録（A B C順）

安部 健夫

1955 『西ウイグル国史の研究』京都、彙文堂書店。

Andreas, F.C.

1910 Zwei soghdische Exkurse zu Vilhelm Thomsens: Ein Blatt in türkischer Runenschrift.
SPAW 1910, pp.307-314.

Bazin, L.

1974 *Les calendriers turcs anciens et médiévaux*. (Thèse présentée devant l'Université de Paris III, 1972), Service de reproduction des thèses, Université de Lille III.

1990 L'inscription kirghize de Sūjī. In: Haneda, A. (ed.), *Documents et archives provenant de l'Asie centrale. Actes du Colloque Franco-Japonais organisé par l'Association Franco-Japonaise des Etudes Orientales*, Kyoto, pp.135-146.

1991 *Les systèmes chronologiques dans le monde turc ancien*. (Bibliotheca Orientalis Hungarica 34), Budapest / Paris.

(75) Cf. Sundermann 1994.

- Boyce, M.
- 1960 *A Catalogue of the Iranian Manuscripts in Manichean Script in the German Turfan Collection*. Berlin.
 - 1975 *A Reader in Manichaean Middle Persian and Parthian*. Leiden / Téhéran / Liège.
- Clark, L.
- 1997 The Turkic Manichaean Literature. In: Mirecki, P. & J. BeDuhn (eds.), *Emerging from Darkness. Studies in the Recovery of Manichaean Sources*, (Nag Hammadi and Manichaean Studies 43), Leiden / New York / Köln, pp.89-141.
- Clauson, G.
- 1962 *Turkish and Mongolian Studies*. London.
- Ebert, J.
- 1994 Darstellungen der Passion Manis in bekannten und unbekannten Bildfragmenten des Bema-Fests aus der Turfan-Sammlung. In: Röhrborn, K. & W. Veenker (eds.), *Memoriae Munusculum. Gedenkband für Annemarie v. Gabain*, Wiesbaden, pp.1-28.
- Erdal, M.
- 1979 The Chronological Classification of Old Turkish Texts. *CAJ* 23-3/4, pp.151-175.
- Esin, E.
- 1976 Notes on the Manichean Paintings of Eastern Turkistan. In: *The Memorial Volume of the VIth International Congress of Iranian Art and Archaeology*, Teheran, pp.49-80.
- Fujieda, A.
- 1991 Future Problems of the Researches on Chinese Buddhist Manuscripts from Turfan. In: Klengel, H. & W. Sundermann (eds.), *Ägypten Vorderasien Turfan*, Berlin, pp.155-160.
- Gabain, A.von.
- 1949 Steppe und Stadt im Leben der ältesten Türken. *Der Islam* 29-1/2, pp.30-62.
 - 1952 *Alttürkische Grammatik*. Leipzig.
 - 1973 *Das Leben im uigurischen Königreich von Qočo (850-1250)*. 2 vols., Wiesbaden.
 - 1974 *Alttürkische Grammatik*, 3rd ed. Wiesbaden.
- Gershevitch, I.
- 1954 *A Grammar of Manichean Sogdian*. Oxford.
- Grünwedel, A.
- 1906 *Bericht über archäologische Arbeiten in Idikutschari und Umgebung im Winter 1902-1903*. München 1906(1905).
- Gulácsi, Zs.
- 1997 Identifying the Corpus of Manichaean Art among the Turfan Remains. In: Mirecki, P. & J. BeDuhn (eds.), *Emerging from Darkness. Studies in the Recovery of Manichaean Sources*, (Nag Hammadi and Manichaean Studies 43), Leiden / New York / Köln, pp.177-215.
- Haloun, G. & W.B. Henning
- 1952 The Compendium of the Doctrines and Styles of the Teaching of Mani, the Buddha of

Light. *Asia Major*, New Series 3-2, pp.184-212.

Hamilton, J.

- 1971 *Le conte bouddhique du Bon et du Mauvais Prince en version ouïgoure*. Paris.
1975 Le colophon de l'irq bitig. *Turcica* 7, pp.7-19.
1977 Le pays des Tchong-yun, Čungul, ou Cumuña au Xe siècle. *JA* 265, pp.351-379.
1986 *Manuscrits ouïgours du IX^e-X^e siècle de Touen-houang*. 2 vols., Paris.
1996 On the Dating of the Old Turkish Manuscripts from Tunhuang. In: Emmerick, E. &c. (eds.), *Turfan, Khotan und Dunhuang. Vorträge der Tagung "Annemarie v. Gabain und die Turfanforschung"*, Berlin, pp.135-145.

Hamilton, J. & L. Bazin

- 1972 Un manuscrit chinois et turc runiforme de Touen-houang. *Turcica* 4, pp.25-42.

羽田 亭

- 1957 『羽田博士史学論文集 上巻 歴史篇』京都, 東洋史研究会.

石田 幹之助

- 1925 「敦煌発見「摩尼光仏教法儀略」に見えたる二三の言語に就いて」「白鳥博士還暦記念東洋史論叢」東京, pp.157-172. (再録: 石田幹之助「東亞文化史叢考」東京, 東洋文庫, 1973, pp.285-298.)

Klimkeit, H.-J.

- 1982 *Manichaean Art and Calligraphy*. (Iconography of Religions 20), Leiden.
1993 *Gnosis on the Silk Road. Gnostic Texts from Central Asia*. San Francisco.
1994 Weltliche und geistliche Macht im Manichäismus Zentralasiens. In: Preissler, H. & H. Seiwert (eds.), *Gnosisforschung und Religionsgeschichte. Festschrift für Kurt Rudolph zum 65. Geburtstag*, Marburg, pp.119-130.

Klyashtorny, S.G.

- 1985 The Tes Inscription of the Uighur Bögü Qaghan. *AOH* 39-1, pp.137-156.

Кызласов, И.Л.

- 1994 Рунические Письменности Евразийских Степей. Москва.

Lalou, M.

- 1939-1961 *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale*, Vols. I - III. Paris.

Le Coq, A. von.

- 1909 Köktürkisches aus Turfan. Manuscriptfragmente in köktürkischen "Runen" aus Toyoq und Idiqut-Schähri [Oase von Turfan]. *SPAW* 1909, pp.1047-1061.
1912-1922 Türkische Manichaica aus Chotscho, I-III. *APAW* 1911-6, 61p.; 1919-3, 15p.; 1922-2, 49p.
1913 *Chotscho. Facsimile-Wiedergaben der wichtigeren Funde der Ersten Königlich Preussischen Expedition nach Turfan in Ost-Turkistan*. Berlin. (Repr. Graz 1979.)
1923 *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien, II: Die manichäischen Miniaturen*. Berlin. (Repr. Graz 1973.)

護 雅夫

- 1975 「スージ碑文の一解釈」『榎博士還暦記念東洋史論叢』東京、山川出版社、pp.445-463.

森安 孝夫

- 1973 「ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」『東洋学報』55-4, pp.60-87.

- 1977 「チベット語史料中に現われる北方民族—— DRU-GU と HOR ——」『アジア・アフリカ言語文化研究』14, pp.1-48.

- 1979 「増補：ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」『流沙海西奨学会（編）『アジア文化史論叢 3』東京、山川出版社、pp.199-238.

- 1980 「ウイグルと敦煌」榎一雄（編）『講座敦煌 2 敦煌の歴史』東京、大東出版社、pp.297-338.

- 1981 Qui des Ouigours ou des Tibétain ont gagné en 789-792 à Beš-baliq? JA 269-1/2, pp.193-205.

- 1985 「チベット文字で書かれたウイグル文仏教教理問答 (P.t.1292) の研究」『大阪大学文学部紀要』25, pp.1-85.

- 1987 「敦煌と西ウイグル王國——トゥルファンからの書簡と贈り物を中心に——」『東方学』74, pp.58-74.

- 1989 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』98-4, pp.1-35.

- 1990 L'origine du bouddhisme chez les Turcs et l'apparition des textes bouddhiques en turc ancien. In: Haneda, A. (ed.), *Documents et archives provenant de l'Asie centrale. Actes du Colloque Franco-Japonais organisé par l'Association Franco-Japonaise des Etudes Orientales*, Kyoto, pp.147-165.

- 1991 「ウイグル=マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』31/32, 248p. (別冊単行本：『ウイグル=マニ教史の研究』大阪 1991, 京都朋友書店取り扱い。)

Müller, F.W.K.

- 1912 Der Hofstaat eines Uiguren-Königs. In: *Festschrift für Wilhelm Thomsen*, Leipzig, pp.207-213.

- 1913 Ein Doppelblatt aus einem manichäischen Hymnenbuch (Mahrnāmag). APAW 1912, 40p.

- 1915 Zwei Pfahlinschriften aus den Turfanfunden. APAW 1915-3, 38p.

Müller, F.W.K. & W. Lentz

- 1934 Soghdische Texte, II. SPAW 1934, pp.504-607.

Poussin, Louis de la Vallée

- 1962 *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library*. London.

Ramstedt, G.J.

- 1913 Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei. JSFOu 30-3, 63p.

Róna-Tas, A.

- 1991 *An Introduction to Turkology*. (Studia Uralo-Altaica 33), Szeged.

Sertkaya, O. F.

- 1985 Fragmente in alttürkischer Runenschrift aus den Turfan-funden. In: Röhrborn, K. & W. Veenker (eds.), *Runen, Tamgas und Graffiti aus Asien und Osteuropa*, Wiesbaden, pp.133-164.

Stein, A.

- 1928 *Innermost Asia. Detailed Report of Explorations in Central Asia, Kan-su and Eastern Irân*. 4 vols., Oxford.

Sundermann, W.

- 1991 Completion and Correction of Archaeological Work by Philological Means: The Case of the Turfan Texts. In: *Histoire et cultes de l'Asie centrale préislamique*, Paris, pp.283-288.

- 1992 Iranian Manichaean Turfan Texts concerning the Turfan Region. In: Cadonna, A. (ed.), *Turfan and Tun-huang. The Texts. Encounter of Civilizations on the Silk Route*, (Orientalia Venetiana 4), Firenze, pp.63-84.

- 1994 Iranische Personennamen der Manichäer. *Die Sprache* 36-2, pp.244-270.

Takeuchi, Ts.

- 1995 *Old Tibetan Contracts from Central Asia*. Tokyo.

Taqizadeh, S.H.

- 1943 The Early Sasanians. *BSOAS* 11-1, pp.6-51.

田坂 輿道

- 1940 「回鶻に於ける摩尼教迫害運動」『東方学報（東京）』11-1, pp.223-232.

- 1941 「漠北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」『蒙古学報』2, pp.192-243.

Tekin, T.

- 1993 *Irk Bitig. The Book of Omens*. Wiesbaden.

Thomsen, V.

- 1910 Ein Blatt in türkischer "Runen"schrift aus Turfan. *SPAW* 1910, pp.296-306.

- 1912 Dr. M.A.Stein's Manuscripts in Turkish "Runic" Script from Miran and Tun-huang. *JRAS* 1912, pp.181-227.

- 1928 Fragment of a Runic Turkish Manuscript Kao.0107, from Kara-khōja. In: A. Stein, *Innermost Asia*, Vol.II, pp.1082-1083, Appendix Q.

上山 大峻

- 1965 「敦煌出土のチベット訳般若心経」『印度学仏教学研究』13-2, pp.783-779. (逆頁)

吉田 豊

- 1988 「カラバルガスン碑文のソグド語版について」『西南アジア研究』28, pp.24-52.

- 1991 「新疆維吾爾自治区新出ソグド語資料」『内陸アジア言語の研究』6 (1990), pp.57-83.

- 1993a 「ベゼクリク・ベルリン・京都——ソグド文字によるマニ教パルティア語の贊歌——」『オリエント』35-2 (1992), pp.119-134.
- 1993b 「中世イラン語と古代チュルク語——マニ教文献中の奥書2種——」『内陸アジア言語の研究』8, pp.127-133.
- Zieme, P.
- 1975 *Manichäisch-türkischer Texte*. (BTT 5), Berlin.
- 1981 Materialien zum uigurischen Onomasticon, II. *Türk Dili Araştırmaları Yılığı Belleten* 1978-1979, pp.81-94.

略号表

<i>AOH</i>	<i>Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae</i> , Budapest.
<i>APAW</i>	<i>Abhandlungen der Preussischen Akademie der Wissenschaften</i> , Phil.-hist. Klasse, Berlin.
<i>ATG</i>	Gabain 1950; Gabain 1974.
<i>Atlas</i>	W. Radloff, <i>Atlas der Alterthümer der Mongolei</i> . St. Peterburg 1892-1899.
<i>BSOAS</i>	<i>Bulletin of the School of Oriental and African Studies</i> , London.
<i>BTT</i>	Berliner Turfantexte.
<i>CAJ</i>	<i>Central Asiatic Journal</i> , Wiesbaden.
<i>ED</i>	G. Clauson, <i>An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish</i> . Oxford 1972.
<i>GSR</i>	B. Karlgren, <i>Grammata Serica Recensa</i> . Stockholm 1964.
<i>JA</i>	<i>Journal Asiatique</i> , Paris.
<i>JRAS</i>	<i>Journal of the Royal Asiatic Society</i> , London.
<i>JSFOu</i>	<i>Journal de la Société Finno-ougrienne</i> , Helsinki.
<i>Manichaica</i>	Le Coq 1912-1922.
<i>RO</i>	<i>Rocznik Orientalistyczny</i> .
<i>SPAW</i>	<i>Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften</i> , Phil.-hist. Klasse, Berlin.
<i>TP</i>	<i>T'oung Pao</i> .
<i>TTT</i>	Türkische Turfan-Texte, Berlin.
<i>UAJ</i>	<i>Ural-Altaische Jahrbücher</i> .
<i>UW</i>	K. Röhrborn, <i>Uigurisches Wörterbuch</i> , vols.1-5. Wiesbaden 1977-1994.

付記 本稿は文部省科学研究費補助金(国際学術研究)による研究成果の一部である。

P.S. Part of the present study is supported by the Grant-in-Aid for International Scientific Research (Joint Research) of the Education Ministry.